http://decfamily.p1.bindsite.jp/2012/

We 15R

No.142　　13/01/22

燃える学生

20日の朝日新聞に、環境問題（特にシックハウス症候群）のスペシャリストであり、東京大名誉教授で、かつ、現在開成中学・高校の校長をつとめている柳沢幸雄さんのインタビューが載っていて面白かった。ちょっと引用してみよう。

＊

――昨年の開成高校の卒業式で「首都圏の進学校出身の学生は東大で伸びない」と話されたそうですね。東大合格者数３１年連続トップ校の校長としては刺激的な発言です。

「パワーポイントを使って式辞を述べた中で、その話をしました。私の目から見ると、東大の学生は三つのグループに分かれます。燃え尽きたグループ、冷めたグループ、燃えているグループです」

「燃え尽きたグループは、中高時代に受験に向けて効率のいい勉強をしてきた子。ある意味、洗練された勉強方法に乗って成績を上げて入学する。ところが入学すると、効率のいい勉強法は教えてくれない。受験の目標も、もう達成できた。それで燃え尽きてしまう」

「冷めたグループは、首都圏の伝統ある進学校です。開成もここ。なぜ冷めているか。これまで通りの自宅通学で、キャンパスにも高校の友達がたくさんいる。高校と変わらぬ環境で、受験という重しがとれる。自分に合った勉強法は身につけているので、大学の成績も真ん中グループへすっと入り余裕がある。だから勉学もそこそこにこなして終わってしまう」

「燃えているグループは、地方の公立高校からきた学生です。まず親元から離れて自活することで大きなカルチャーショックを受ける。知る顔もいない大学で、自分の居場所をどう作るか。１８歳でこれまでの生活と切れ目をつけ、ものを考え始めるわけです。だから燃える」

――最終的に伸びるのは「燃えているグループ」ということですか。

「そうです。学部時代から燃えているから、修士に行くと本当に伸びます。開成の卒業生にも『まず親元から離れなさい』と言います。ハーバード大にしても学部は寮生活です。東大も秋入学をするなら、いっそ高校卒業後の春から秋まで家を離れてボランティアなり農場や工場で働くなり、自活の経験をさせたら素晴らしいと思いますね」

＊

この柳沢先生、一度は就職するが、

「会社員時代、ユージン・スミスが撮影した一枚の写真にショックを受けたんです。胎児性の水俣病の十代ぐらいの子を、母親が日常の顔で入浴させている。私から見れば非常に悲惨な状況なのに、母親にとってはそれが日常。これは、許してはいけない。これで私の人生は決まりました。学習塾を自分で起こして稼ぎながら、大学院に入り直し、博士課程まで大気汚染の研究をした」

という人物である。自分が生涯をかけるべきものと出会い、その出会いを大切にして人生を歩んできた人の言葉である。参考にしよう。